

## 〈祈りのために〉

「あなた方は、罪と取り組んで戦う時、まだ血を流すほどの抵抗をしたことがない」。

ヘブル人への手紙 12章4節（口語訳）

自民党は「憲法改正」を選挙公約に明記した。そこには「国旗・国歌」の尊重、「元号」の制定、9条の「国防軍」の設置、13条では「個人の尊重」から「人」に代わり、20条の「宗教の自由」は「公共の福祉に反しない限り」とある。その目指すところは大本日本帝国憲法にある。その憲法には天皇自身の作品という性格があり、天皇の思し召しに拠る支配という「国家無答責の法理」が横たわっている。その法理は、官吏が天皇に対してだけ責任を負い、公権力の行使によって国民に損害を与えても、国家は損害賠償責任を負わないとする原則である。それに向けた憲法改正である。

安倍政権は特定秘密保護法を強行に決定し、憲法学者や国民の大半が反対する「集団的自衛権」行使を容認し、憲法の番人といわれる内閣法制局が憲法違反と指摘しても、聞く耳を持たない。戦争法案成立後、自衛隊員の除隊率が増えているようだ。彼は財界の要望による武器輸出3原則を解禁して、豪に潜水艦を建造する計画（受注不可）をしたり、インドに武器を輸出した。2016年度の防衛関係費が5兆円を突破し、在日米軍関係経費は昨年度が過去最大で7278億円。その中の今年度の「思いやり予算」はさらに増額のように見える。

消費税の導入は福祉に当てるためと言われたが、福祉には15%しか使われず、残りは何処に消えたのか。今度はさらに消費税10%にするという。これまた福祉へと詭弁を弄することしきり。戦争の近づき方は声高に叫んで来るのではない。国民のために福祉のためと言って、裏側に隠れて忍び寄ってくる。よほど目を凝らして見ていないと、またしっぺ返しを食らってしまう。戦争は、容易にわかる形で近づいては来ない。ひたひたと忍び寄り、いきなり平和を破壊するのである。

マルチン・ニーメラー牧師はこう語った。「ナチスが最初共産主義者を攻撃したとき、私は声をあげなかった。私は共産主義者ではなかったから。社会民主主義者が牢獄に入れられたとき、私は声をあげなかった。私は社会民主主義者ではなかったから。彼らが労働組合員たちを攻撃したとき、私は声をあげなかった。私は労働組合員ではなかったから。そして、彼らが私を攻撃したとき、私のために声をあげる者は、誰一人残っていなかった」と。

私たちは、1945年8月19日、福岡城南教会の礼拝で語られた藤田治芽牧師の説教に耳を傾けるべきである。「人が国の興亡に努める力の物凄い（中で）、教会が福音の宣教のために平素どれだけ熱と祈りを傾け、また狂えるごとくに人の魂を愛したか。『罪と戦って未だ血を流ししことなし』。これだからキリストの聖旨も御国も実現しないのだと言われても仕方がない。もし真のものを求め、願い、慕うなら、教会の宣教の戦いを始めなければならぬ。これから我々は戦いに臨むのだ。我々はこの第一線に向かわんとするのだ。教会は生易しい道をたどることは許されぬ。教会が戦いを回避したために、国に、同胞に、申し訳なき罪を犯した。この自覚と悔い改めのために、教会は戦いに行くのだ。福音の宣教の戦場に臨むのだ。平らな道、安易な場合は、決して地上の教会にはない。地上の教会は、戦闘の教会であり十字架の下にある教会だ」（「日本基督教会福岡城南教会史」p153 一部掲載）。

島田善次（宜野湾告白伝道所牧師）

## [ヤスクニ問題と私]

「ヤスクニ問題・北海道における取り組み」…札幌を中心に…

久野真一郎(札幌琴似教会牧師)

参議院選挙の結果、改憲勢力が三分の二を確保するという状況が現実のものとなりました。早速彼らの本丸である憲法改正への動きが加速しつつあります。また安倍首相の任期を延長させようとする目論見も表面化し、予断を許しません。「まさかそういうことにはならないだろう」と思われていたことが、すでにそうなってきたという現実をわたしたちは認識し、今為すべきことを為すことが求められているのではないのでしょうか。以下に北海道中会としての取り組み、またわたしが関わっている札幌での超教派の、また宗派を超えた取り組みについてお伝えしたいと思います。

去る7月18日(月)、札幌北一条教会において中会ヤスクニ・社会問題委員会主催による本年度の公開講座が行われました。主題は「立憲平和主義の危機と自民党改憲草案の本質」、講師は結城洋一郎氏(小樽商大名誉教授、憲法学)でした。同氏は現安倍政権が極めて強権的手法で立憲主義を根底から破壊しつつある現実を強調されました。一党独裁体制が巧みに構築されつつあるのだということを、あらためて思わせられた次第です。

さて北海道ではこの公開講座のような教派毎の集会、2・11、7・7、8・15集会のような地域毎の集会、また6・6(旭川)、11・23(札幌)集会のような全道規模の集会が毎年行われています。また宗派を超えた宗教者懇談会がやはり毎年札幌で続けられています。このように何れの集会も途切れることなく継続されていることが、北海道の一つの特色であり力だと思えます。

わたし自身は靖国神社国営化法案提出以来活動を続けている靖国神社国営化阻止キリスト者グループに属しています。ニュースの発行、抗議行動、学習会、問答書の作成等を行っていて、メンバーは札幌在住各派教職・信徒です。札幌ではまた昨年9月19日に強行採決された安全保障関連法に抗議し、撤廃を求めて「安保法制」に反対する北海道宗教者連絡会が活動を開始しています。これは毎月19日、教派や宗派を超えて集まった参加者のアピールを聞き合い、スタンディングを行う自由な形の取り組みです。7月からは市電を借り切り、リレートーキングをしながら市内を一周し、すすきのでスタンディングを行うというユニークな活動が始まりました。この日は皆で平和ソングを歌う等思いを合わせることが出来、大変励まされた次第です。情勢は厳しいですが、終末の希望に生きる者として、これからも各地での声を挙げ続けましょう。

**沖縄の今** — 「メンソーレ、沖縄に来てみませんか。第2弾」に参加して—

尾谷則昭(靖国神社問題特別委員会委員)

昨年に続き、靖国神社問題特別委員会第4回委員会を沖縄伝道所で開き、それに続けて「メンソーレ、沖縄に来てみませんか。第2弾」を呼び掛けたが、今年是人権委員会が一足先にツアーを企画(数名の参加者があった由)したこともあり、当ツアーへの一般からの参加者はなかった。

委員5名と宜野湾告白伝道所島田善治牧師の6名は、川越牧師の車とレンタカーの2台で、名護、辺野古、高江へのツアーを行った。ツアーに先立ち、6月27日(月)、委員会の初日

を終えて「普天間基地ゲート前でゴスペルを歌う会」（毎週月曜 18:00~19:00）に合流した。この会を主導しておられる普天間バプテスト教会の神谷武宏牧師ほか1名は、当日、東京で同時開催の「首相官邸前でゴスペルを歌う会」に参加されて不在であったが、約40名が司会のリードで、「ゴスペルソング集」から数曲と末尾に記載されている10の聖書箇所を読み上げた。奇しくもJEDRO（NCCエキュメニカル震災対策室）で一緒にいた、在日大韓キリスト教会京都南部教会（当時につくば東京教会）許伯基牧師一行も参加しておられ、一緒に写真に納まった。

翌28日（火）、昼過ぎまで掛かった委員会を終え、遅い昼食の後「道の駅かでな」で嘉手納基地を見渡すと共に資料館を見学、国道58号から宿舎の名護に向かった。途中、4月に起きた元海兵隊員による暴行殺人事件の遺体遺棄現場（恩納村）に立ち寄り、祈りを捧げた。

29日（水）、午前7時までに辺野古のキャンプ・シュアブ前に着くべく6時前に、名護の宿を発った。ゲート前に駐車できないため、従来からの「座り込みテント村」近くの駐車場に車を置き、送迎車でゲートに向かう。7時のゲート前は警備を受託しているALSOK（アルサク・警備業）の警備員3,4名のみで静かであったが、既に日差しは強く、立っただけで汗が吹き出してきた。やがて、三々五々に抗議のプラカードを持った人がゲート横の歩道に立ち、出入りする基地関係者に抗議の意思を示した。島田牧師は当然の如く「Marines! Go home!」と太い声で叫び、車を運転して出入りする海兵隊員を睨みつけておられた。当日は抗議の主体は嘉手納基地に参集しているとのことで、こちらのゲート前では我々6人を含む約30人が9時過ぎからゲート前でデモをした後、出口を塞ぎ座り込んだ。ゲート内のスピーカからは最初はガードマンから、続いて沖縄県警から立ち退きを要請するアナウンスが繰り返される。沖縄平和運動センター議長山城博治さんが座り込みの陣頭指揮を取り、昨今の現状説明と抗議を述べたあと、加盟団体代表の挨拶があり、抗議の歌を歌う。歌をリードする人、エイサーで場を盛り上げる女性サポーター、相手の怒りを鎮め緊迫した空気を和ませる知恵が随所に盛り込まれている。ゲート内には出口を塞がれた車が何台も列をなし、諦めて折り返す車も。20分ほど経過した頃、県警は機動隊員による座り込み者排除を告げ、約20人の機動隊員が幅約20mの出口の1/3くらいのところに一列になって入り込んで来て、人の壁を築き、1/3のところに座り込んでいる者を数人で一人ずつを抱え込んで、一列の車道を確保し始める。排除されたらまた戻ってくれば良いので、抵抗はしないようにとの指示の下、緊迫はしているが大きなトラブルはなく、やがて車道が確保されると車が動き出す。デモを始めてから約一時間で、座り込みを解き、休憩に入る。休憩時にはヨガのインストラクターが疲れを癒すヨガ教室を行って、連帯感を盛り上げることに一役買っていた。

我々は高江のヘリパッド建設地に向かうため、ヨガ教室の途中で辺野古キャンプ・シュワブゲートを後にする。国道329-58-県道9-331-県道70をひた走り、13時ごろ高江「ヘリパッドはいらない」住民の会のN-4テントに着く。途中、県道70号に入った太平洋に面した小さな地場の食堂で昼食を摂る。島田牧師のお勧めで「てびち」（豚足を煮込んで柔らかくして、味付けした料理）の定食を食べる。コラーゲンたっぷり、暑さと疲れを吹き飛ばしてくれるように思った。

N-4テントでは高江の現状（追記：伊波洋一当選が確定した7月10日の翌早朝、沖縄防衛局は機動隊による制圧体制を敷きながら、トレーラーにプレハブ施設や簡易トイレを載せたものを始め、大型工事車両を米軍北部訓練場のメインゲートに搬入した。）について当日の代表から説明を聞き、それから宜野湾市に向かった。佐喜真美術館では、常設展示の丸木位里・丸木俊「沖縄戦の図」を前に、佐喜真道夫館長自らが修学旅行生への解説中であった。特設の「ジョルジュ・ルオー版画展」他を観た後、島田牧師の紹介で佐喜真道夫館長と暫し歓談し、美術館の展望台から普天間基地全貌を眺め、宜野湾告白伝道所へ向かった。

宜野湾告白伝道所は、会員の皆さんが病院勤務のため、通常の祈祷会に参加できないとのことで、われわれ6人でツアーの締めくくりも併せて、祈りを捧げた。靖国委員会に続く慌ただしい1日半間ではあったが、沖縄の現状をつぶさにする密度の濃いツアーであり、改めて本土の犠牲を押し付けていることを思わせられた。そのことへの“否”に生活を掛けて戦っておられる全てのウチナンチューに、また沖縄伝道所、宜野湾伝道所に敬意を表したい。

## ＜ヤスクニ・ニュース＞

明仁天皇の「生前退位の意志表明」は、安倍政権と日本会議の改憲＝戦前回帰に対する最後の抵抗か！

「週間 LITERA」7月14日から

7月13日、NHKが報じた「天皇が生前退位の意向」。NHKの情報源は「宮内庁関係者」ということだったが、その直後に宮内庁は完全否定した。今回のNHKの情報源は、天皇本人にきわめて近いスジではないかといわれている。「今回、スクープしたのはNHKの宮内庁担当のHという記者なんです、彼は秋篠宮に食い込んでいる。そんなところから、天皇が秋篠宮を通じて意志を伝えたのではないかとされています。実際、秋篠宮は数年前、記者会見で『（天皇の）定年制が必要になって来ると思います』と述べたことがあり、このときも天皇の意向を代弁したものだといわれました。天皇はこのころからしばしば生前退位の制度を作るよう要望を出されていたのですが、1年前くらいからその意向が非常に強くなったようです。」（全国紙宮内庁担当記者）

では、なぜ、天皇は改めて、生前退位の姿勢を強く示したのか。新聞・テレビは「自らの体調を考慮」などと報じているが、そんなことでこの行動は説明できない。なぜなら、現行の皇室典範でも天皇が公務に支障がある場合は、摂政をおくことができるからだ。実は、宮内庁関係者の間では、今回の「生前退位の意志」報道が、安倍政権の改憲の動きに対し、天皇が身を賭して抵抗の姿勢を示したのではないかと、という見方が広がっている。というのも、生前退位こそが、今、安倍政権や日本会議が復活を目指している大日本帝国憲法の思想と真っ向から対立するものだからだ。

実は、生前退位というのは江戸時代後期までの皇室ではしばしば行われていた。ところが、明治になって、国家神道を国家支配のイデオロギーと位置づけ、天皇を現人神に仕立てた明治政府は、大日本帝国憲法と皇室典範によって、この生前退位を否定、天皇を終身制にした。「万世一系」の男性血統を国家の基軸に据え、天皇を現人神と位置づける以上、途中で降りるなどということを許すわけにはいかない。終身制であることは不可欠だったのだ。つまり、明仁天皇はここにきて、その明治憲法の真髄とも言える終身制をひっくり返し、真逆の生前退位を打ち出したのである。天皇が生前に退位するということは、天皇は国家の「役職」にすぎないということを示すことだ。役職だから、時期が来たら退位する。役職を果たせなくなったら交代する。もし、これが制度化されたら、天皇をもう一度、現人神に担ぎ上げ、国民支配のイデオロギーに利用することは難しくなる。そのために、天皇はこの「生前退位の意志」を明確にしたのではないかと、いうのだ。これはけっして、妄想ではない。天皇と皇后がこの数年、安倍政権の改憲、右傾化の動きに危機感をもっていることは、宮内庁関係者の間では、常識となっていた。実際、第二次安倍政権が発足し、改憲の動きが本格化してから、天皇、皇后はかなり具体的に踏み込んだ護憲発言を何度も口にしている。（前半を抜粋）

## 沖縄から

選挙戦に大勝すると政府は人が変わったように、米軍北部訓練場（国頭村東村高江）のヘリパット建設工事を始めている。これまでの計画6ヶ所のヘリパット工事のうち2か所は完成しているが、住民の反対で未工事となっている。政府は22日に工事着手を公言しており、警視庁などは500人規模の機動隊を順次派遣し、体制が整い次第工事作業に入る予定。反対住民らが22日になってから高江に入ることは困難で、機動隊による排除を警戒して、ひとりでも多くが高江の現場に居ることが出来るよう周囲に呼び掛けている。また、朝7時（もしくは7時半）の嘉手納基地第1ゲートの封鎖の他に、第6ゲートの抗議・封鎖も検討している。普天間基地大山ゲート、野嵩ゲートでの抗議封鎖も含め、県内の各基地を封鎖することで、高江の機動隊を分散させることも検討している。どうか、皆様のお祈りとご支援をお願いしたい。（沖縄タイムス7月16日・辺野古浜通信7月21日）

739号ヤスクニ通信 2016年8月14日  
発行 日本キリスト教会  
靖国神社問題特別委員会  
発行人 栗田英昭 編集 川越弘  
印刷発行 篠塚予奈（東京告白教会）  
〒157-0061 東京都世田谷区北烏山  
1-51-12 TEL&FAX03-3300-6529